「文化遺産―グローバルな概念の形成―」

デルフィーヌ　ヴォムシャイド

発表の要旨

20 世紀から、国際機関ユネスコ（国連教育科学文化機関）は文化遺産やその保存・保護に関する協議というグローバルな言説を広める。ユネスコ加盟国の多様性に象徴される文化の多元性にもかかわらず、このような言説は、文化遺産の概念や実践に対する西洋的な見方を長く反映してきた。日本が 1972 年の「World Heritage Convention」（世界遺産条約）の締結を 20 年遅らせたのは、このようなヨーロッパ中心主義の影響であり、一方で日本は様々な国際的な遺産保護プロジェクトへの資金提供にも関わっていた。その主な理由は、西洋の遺産観の基本であり中心であるオーセンティシティ、特に物質的なオーセンティシティという概念が、日本で見られる文化遺産に関する慣習や文化を反映していなかったからである。最終的に、日本は 1992 年にこの条約に締結し、その 2 年後にユネスコ奈良国際会議を開催して、世界の遺産概念に永続的な影響を与えることになる「Nara Document on Authenticity」（オーセンティシティに関する奈良ドキュメント）が発行された。伊勢神宮の式年遷宮に注目し、建築物の保存につながる物質的な更新の伝統は、アジアの建築遺産が西洋の建築遺産に対する根本的に異なる概念の原型になってきた。さらに、伊勢神宮の式年遷宮は、無形遺産という新しいタイプの遺産を前面に押し出しています。式年遷宮により、職人が代々受け継いできた建築技術は、今ではそれ自体が遺産となっている。それ以来、日本と伊勢神宮の事例は、アジアの伝統的な慣習の文化的な違いの例として非常によく引用されているが、式年遷宮の宗教的な意味はさておき、英語では単に「reconstruction」（復元・復興）とは訳せないような、ある種の誤解を含んでいる。このように、式年遷宮という孤立した慣行を一般化することは、日本における遺産慣行の複雑な性質について誤解を広め、グローバルな言説の混乱を招くことになる。

現在進行中の研究である本発表では、グローバルな文化遺産の概念の形成における日本の役割、特に建築遺産について議論したいと思っている。文化遺産というテーマは膨大かつ複雑であり、その問題点をすべて網羅することは意図していない。むしろ、日本の文化、そして特定の遺産の慣習が、グローバルな概念を豊かにするだけでなく、オーセンティシティという概念に対する誤解や誤認をもたらしたことに焦点を当てる。西洋と日本の古い建物の復元の事例を通して、文化遺産の慣行に与える相互の影響と、それが「文化の融合」の一部であることを明らかにしようとしている。